

豊崎由美アワー 第30回『読んでいいともガイブンの輪!』
年末スペシャル「オレたちガイブンリーガ―の自信の1球と来年の隠し球」vol.2
2013年12月28日@東京堂書店神田神保町店

【河出書房新社】

★今年のイチオシ

ジョイス・キャロル・オーツ『とうもろこしの乙女、あるいは七つの悪夢 ジョイス・キャロル・オーツ傑作選』
榎木玲子訳

美しい金髪の下級生を誘拐する有名私立中学校の女子三人組(「とうもろこしの乙女」)、屈強で悪魔的な兄にいたぶられる善良な芸術家肌の弟(「化石の兄弟」)、好色でハンサムな兄に悩まされる奥手で繊細な弟(「タマゴテングタケ」)、悪夢のような現実に落ちこんでいく腕利きの美容整形外科医(「頭の穴」)……。現代アメリカを代表する女性作家が自ら選んだ傑作選。プラム・ストーカー賞(短篇小説集部門)、世界幻想文学大賞(短篇部門「化石の兄弟」)受賞

ちなみに、河出のガイブンで今年一番売れた本はというと、ロバート・F・ヤング『たんぼぼ娘』(伊藤典夫訳)でした。「奇想コレクション」完結!

★来年のイチオシ隠し球(以下、タイトルは変更する場合があります)

カレン・ラッセル『狼少女たちの聖ルーシー寮』松田青子訳 4月刊行予定

いま最も注目されている米作家のひとり、カレン・ラッセルのデビュー短篇集を、今最もコンテンポラリーな作家・松田青子が翻訳! 狼人間に育てられた娘たちを預かる寄宿舎を舞台に描く表題作をはじめ、奇妙でときにダーク、ときにノスタルジックな全10編を収録

ヴァーギノフ『山羊の歌』東海晃久訳 1月

幻のロシア文学者を本邦初紹介。ペトログラードを彷徨う、「名もなき詩人」の自死までをリリズムと実験性ととも描くおそろべき名作

ティムール・ヴェルメッシュ『帰ってきたヒトラー(上・下)』森内薫訳 1月

世界的ベストセラー、ついに日本上陸! 現代に突如よみがえったヒトラーが芸人となって巻き起こす爆笑騒動の連続を描く話題の諷刺小説

ブレット・イーストン・エリス『帝国のベッドルーム』菅野楽章訳 2月

ハリウッドの脚本家が巻きこまれる謎の失踪事件の数々。鍵を握る絶世の美女。アメリカ社会の抱える恐怖を描き続ける作家の最新作

ショーン・タン『見知らぬ国のスケッチ アライバルの世界』小林美幸訳 来春

大きな話題となった「文字のない絵本」『アライバル』刊行から3年。作家は何を考え、どのようにこの作品に取り組んだのか。驚異のスケッチブックです!

エル・トーレス&ガブリエル・エルナンデス『自殺者たちの森』轟志津香訳 来春

「リング」の中田監督によりすでに映画化決定したスペインのホラー漫画。舞台は青木ヶ原の樹海。森の監視員として働くリョウコ。彼女にはこの森同様、多くの秘密が隠されていて、父との関係の物語がある。自殺の森で彼女たちを待ち受ける闇が、また魂の闇が、ふたりに触手を伸ばしてくる。『呪怨』のような、ホラー傑作!

マイクル・コーニイ『ブロントメク!』(河出文庫) 遠山峻征訳 来春

『ハローサマー、グッドバイ』のコーニイ最高傑作と名高き名著、ついに復刊。

ヴァディ・ラトナー『バニヤンの木陰で』市川恵里訳 来春

クメール・ルージュ支配下のカンボジアの惨状を、7歳の少女の視点で描く。著者の実体験に基づいた、感動的な小説

ジョン・スラデック『ロデリック』柳下毅一郎訳 来春

捨てられてしまった自己学習型ロボットの受難と成長を描く、ピカレスク・ロボット・オペラ。絶賛翻訳中！（ですよね、柳下さん！：担）

L・マリー・アデアイン『シークレット・シェアード』栗原百代訳 来春

全世界の女性を虜にした話題の官能ロマンシリーズ第二作。新たなヒロインが加わり、ロマンティックさもエロティックさも2倍に！

メヒティルト・ボルマン『沈黙を破る者』赤坂桃子訳 来春

半世紀を超えて甦る忌まわしいナチの記憶。父の秘密を追う主人公が巻きこまれる小さな悲劇。2012年ドイツミステリ大賞受賞作

アン・ビーティ『この世界の女たち アン・ビーティ短篇傑作選』岩本正恵編訳 来春

美しい世界の裏側に潜む、逃れようのない真実。ミニマリズムを超えた繊細なテキスト。2000年以降の作品を中心に編んだ日本語版オリジナル短篇集

ロレンス・ダレル『アヴィニオン五重奏4 セバスチャン』藤井光訳 来春

コンスタンスへの愛と、所属するグノーシス主義教団の掟との間で引き裂かれるアッフアド。彼の苦悩を軸にスリリングなストーリーが展開

『かわいい闇』マリー・ボムピュイ原案、ファビアン・ヴェルマン作、ケラスコエット画、原正人訳 来春

あまりにも可愛い絵柄、そして卓越した表現力。奇妙で意地悪で汚い人間性を突いてくるストーリー展開。フランスが誇るBD作品がついに邦訳される！ 静かな暴力性を語った、一風変わった問題作！

トム・ジョーンズ『コールド・スナップ』舞城王太郎訳 来春

twitter 文学賞の原点「2009年に出版面白海外小説」第1位のトム・ジョーンズ『拳闘士の休息』。これに次ぐ短篇集を、あの舞城王太郎が初翻訳

ゼイディー・スミス『美しさ』堀江里美訳 来夏

人を愛し、信頼し、裏切られ、傷を負う。『ホワイト・ティース』の著者による「21世紀版ハワーズ・エンド」。オレンジ賞受賞

ラティフェ・テキン『乳しぼりのクリスティンとゴミの町のおとぎ話』宮下遼訳 来夏

現代中東文学を代表するトルコ人作家の代表作。スラムの住人を見舞う試練、それに抗う人々。しかしやがてそこは奇怪な異界に変容していく。幻想的でダークな現代のおとぎ話

ショーン・タン『夏の約束』岸本佐知子訳 来夏

既刊『遠い町から来た話』の最終話におさめられた、著者自身と兄をモデルとした兄弟が登場する大型絵本！ 生き生きとした絵に圧倒されます！

カート・ヴォネガット『ヴォネガット未発表短篇集』大森望訳 来夏

天才ヴォネガットの生前未発表短編14を、天才訳者浅倉久志亡きいま大森望が挑む！

ミハル・アイヴァス『黄金時代』阿部賢一訳 来夏

虚構の島と（無限に増殖する本）をめぐる異形の紀行文学。『もうひとつの街』のチェコ作家がおくる、想像力と

技巧に満ちた大作。Amazon.com/SF ファンタジー部門1位獲得

デイヴィッド・ミッチェル『ヤコブ・デズートの千秋（上・下）』土屋政雄訳 来夏
江戸時代の長崎出島。邪教の尼寺に拉致された美女の運命はいかに。『クラウド・アトラス』の著者による、ピン
チョン×山田風太郎の空想歴史大ロマン

パトリック・シャモワゾー『素晴らしきソリボ』関口涼子訳 来秋
クレオール作家の代表作。一人の語り部の不可解な死を中心に、ボッカッチョやラブレーにつづく口承文学と
記述文学の出会いを扱う画期的小説

ブラープダー・ユン『パレイドリアの日々』宇戸清治訳 来秋
17歳の夏、東京。私は初恋の男から「錯視」に感染した…タイのポストモダン文学の旗手による待望の短篇集（日
本語版オリジナル）。

余華『第七日』飯塚容訳 来秋
臓器売買、嬰兒の遺体遺棄、住宅の強制立ち退きなど、一人の死者が彷徨する現代中国の闇の世界。刊行と同時
に70万部の大ベストセラー

ミハイル・エリザロフ『図書館司書』北川和美訳 来秋
失われた奇書をめぐり図書館で戦争が始まる。現代ロシアが生んだ破壊的スプラッターノヴェル。ロシア・ブッ
カー賞受賞

ロレンス・ダレル『アヴィニョン五重奏5 クインクス』藤井光訳 来冬
全5巻最終巻。これまでの登場人物たちが南仏で一堂に会し、いよいよテンプル騎士団の謎の解明に向かってい
く。

岸本佐知子編訳『コドモノセカイ』 来冬
子供にまつわる、誰も読んだことのないような、暗くて奇妙な心に迫る短篇を集めたオリジナルアンソロジー。
雑誌『文藝』で1月から連載開始

ジョージ・ソーンダース『十二月の十日』岸本佐知子訳 来冬
負け犬たちの奇妙で優しい日々。『短くて恐ろしいフィルの時代』が好評を博した現代アメリカ最重要作家の最新
短篇集

ホルヘ・ボルピ『クリングゾールをさがして』安藤哲行訳 来冬
ハイゼンベルク、ゲーデル、プーランクら、ノーベル賞級科学者とヒトラーの謎の顧問をめぐる物語。ボラーニ
ョ以後のラテンアメリカ文学の旗手、ついに邦訳なる

ウラジーミル・ソローキン『氷』松下隆志訳 来冬
氷のハンマーで覚醒する「真の名」をもつ仲間たち。現代ロシアの死と再生を目論むカルト教団を描いた氷3部
作の第1作。続篇『プロの道』『23000』も続刊

エドワード・ゴーリー著 柴田元幸訳『蟲の神』 来冬
久しぶりのゴーリー作品は、初期代表作の一つでゴシックなホラー。神経質なまでに描き込まれた線画の美しさ
と、子供たちが不意に襲われる運命の非道さ。ゴーリーな（血まみれな）物語に身悶えます！

【国書刊行会】

★今年の一冊

『パウリーナの思い出に』 アドルフォ・ビオイ＝カサーレス／高岡麻衣、野村竜人訳

★来年のラインナップ

ジーン・ウルフ初期長篇『ピース』（西崎憲、館野浩美訳）は1月、ウルフ『ウィザード・ナイト』（全4冊、安野玲訳）は春に必ず出します！

●《ウィリアム・トレヴァー・コレクション》

『異国の出来事』（短篇集） 榎木伸明訳

『Love and Summer』（長篇・2010） 谷垣暁美訳

『The Children of Dynmouth』（長篇・1976） 宮脇孝雄訳

『Two Lives』（中篇2篇・1992） 榎木伸明訳

●横山茂雄・若島正責任編集 海外文学シリーズ

アイリス・オーウェンズ『After Claude』（1973）

L. P. デイヴィス『The Artificial Man』（1965）

シャーリー・ジャクソン『The Bird's Nest』（1954）

ドナルド・ウェストレイク『Adios, Scheherazade』（1970）

ステファン・テメルソン『The Mystery of the Sardine』（1986）

ロバート・エイクマン『The Attempted Rescue』（1966）

チャールズ・ウィリアムズ『The Place of the Lion』（1933）

ジョン・メトカーフ短篇集

サーバン『The Doll Maker and Other Tales of the Uncanny』（1953）

マイクル・ビショップ『Who Made Stevie Crye?』（1984）

●ジャック・ヴァンス・トレジャリー

『宇宙探偵マグナス・リドルフ』 酒井昭伸訳

『切れ者キューゲルの大冒険』 中村融訳

『スペース・オペラ（+短篇）』 白石朗、浅倉久志訳

『マルセル・シュオップ全集』

大濱甫・多田智満子・宮下志朗・千葉文夫ほか訳

【白水社】

★今年の自信の1球

●ボラーニョ・コレクション

松本健二訳『売女の人殺し』2013年10月刊

インドから帰還した同性愛者のカメラマンの秘められた記憶、Bと父がアカブルコで過ごした奇妙な夏休み、元サッカー選手が語る、謎のチームメイトとの思い出…。貴重な自伝的エピソードも含む、「秘密の物語」の数々。心を震わす13の物語。解説：若島正

★来年（2014年）の隠し玉（海外小説の刊行予定、すべて仮題）

●エクス・リブリス Ex Libris

2月 オルガ・トカルチュク 小椋彩訳『逃亡派』[ポーランド]

コペルニクスが太陽系のモデルを明らかにしたその年、イタリアの解剖学者ヴェサリウスが世界最初の解剖図を

出版した。天体と人体、二つの地図を人間が同時に描き出した歴史的偶然をモチーフに、時代や国境を越え、宇宙的イメージが重なり合い絡み合う傑作長篇

4月 遅子建 竹内良雄、土屋肇枝訳『アルゲン川の右岸にて』[中国]

中国東北部で消滅しかけている少数民族、エヴェンキ族の90歳の古老が、川とトナカイと自然に根ざした遊牧生活と、漢民族やロシア、日本軍に翻弄されるおよそ100年の歴史を、安らかに、時として激しく、民族の史詩のように物語る長篇。茅盾（ボウジュン）文学賞受賞作品。

6月 ポール・ユーン 藤井光訳『いつかの岸』[韓国]

チェジュ（済州）島をモデルとした韓国の架空の島、ソラに暮らす人々、日本からの移民、アメリカ兵たちのささやかな人生。静謐で慎ましい筆致で、息を飲むような奥行きをもつ小宇宙を作り出す、韓国系アメリカ人作家による珠玉の連作短篇集

8月 パトリック・オウジェドニーク 阿部賢一、篠原啄訳『エウロペアナ』[チェコ]

現代チェコ文学を牽引する作家が、笑いと皮肉のなかに二十世紀という時代の不条理さを巧みに表出する「歴史書の顔をしたフィクション」。チェコ国内のみならず、欧米の批評界で高い評価を集め、21の言語に翻訳されたデビュー作

10月 エステルハージ・ペーテル エシュバツハ＝サボー、加藤由美子訳『ひとりの女』[ハンガリー]

ひとりの男が「ひとりの女」とその愛憎、性愛について語り、言葉や存在の不確かさやその可能性を問いかける。97の短い断章がすべて「ひとりの女がいる」という一文で始まる、斬新な作風と言語感覚によって現代中欧を代表する作家による異色作

12月 ダニエル・ムイヌディン 藤井光訳『遠い部屋、遠い奇跡』[パキスタン]

1970年代から現代まで、パンジャブ地方の大地主ハルニー族と彼らのもとで働く人々の人間模様を描く。チャーホフ、マンローやトレヴァーの短篇にも比肩しうる、パキスタン出身の気鋭による連作短篇集。

●エクス・リブリス・クラシックス Ex Libris Classics

1月 ラクロ 桑瀬章二郎・早川文敏訳『危険な関係』[フランス]

誘惑、凌辱、そして恋……革命前夜のフランス上流社交界を舞台に繰り広げられる、誘惑者と恋する者の心理戦。「征服すること」を自らの使命とした男女二人の誘惑者のパワーゲーム。快楽か情熱か、征服かそれとも破滅か？フランス恋愛小説の白眉、40年ぶりの新訳。

●ボラーニョ・コレクション

3月 久野量一訳『鼻持ちならないガウチョ』

カフカやボルヘスへのオマージュを含めた五つの短篇、驚くべき知性とユーモアが発揮された二つの講演原稿を収録。没年に刊行された最後の短篇集 解説：青山南

9月 松本健二訳『通話』（改訳）

売れない作家や三流詩人、女たちの奇妙な人生、世に知られないテキスト……それらの小さな「声」に耳を傾け、限りない共感に満ちたまなざしを注ぐ十四の物語 解説：いとうせいこう

●ゼーバルト・コレクション

3月 鈴木仁子訳『鄙の宿』

ゼーバルトが偏愛したヴァルザーほか、作家・作品と人生を綴るエッセイ集。「幸福」とは言えなかった生き様、書くことを止められなかった先達への凜としたオマージュ。解説＝松永美穂

●Uブックス 海外小説 永遠の本棚

1月 ロバート・クラーヴァー 越川芳明訳 U『ユニヴァーサル野球協会』

仮想現実のプロ野球リーグの世界にのめりこむ男の悲喜劇。60～70年代、ピンチョン、バース、バーセルミとともに活躍した作家による、ポストモダン小説の白眉。

3月 グスタフ・マイリンク 今村孝訳 U『ゴーレム』

夢と現実が混淆する多重構造を持つ物語。不安や都市生活の悪夢をゴーレム伝説に託して描き、カフカ作品にも比肩される名作。図版多数収録。

5月 チャールズ・ディケンズ 小池滋訳 U『エドウィン・ドルードの謎』

忽然と失踪したドルード。事件の背後にあるのは？ 作家が追求してきた人間「悪」が近代的に洗練され、心理的にも深みを増した未完の遺作。

7月 ブルース・チャトウィン 池内紀訳 U『ウッツ男爵』

蒐集家の生涯とチェコの20世紀史を重ね合わせながら、蒐集という情熱、その不思議な姿を、軽妙にして滋味あふれる語り口で浮かび上がらせる逸品。

9月 フラン・オブライエン 大澤正佳訳 U『スウィム・トゥー・バーズにて』

一日の大半をベッドで過ごす主人公が執筆中の自称「大傑作」。ジョイスらが絶賛した、小説の中の小説の中の小説。12月刊の『第三の警官』に続けて刊行。

11月 イーヴリン・ウォー 吉田健一訳 U『ピンフォールドの試練』

中年作家ピンフォールドは薬と酒で心身を害し、療養の船旅に出るが、過去を穿鑿され、悪口を言う幻聴に悩まされる。最晩年の小傑作。

●そのほか

1月 クレア・トマリ 高儀進訳『チャールズ・ディケンズ伝』

文豪の素顔と永遠の名作の舞台裏とは？ 創作秘話や朗読巡業、愛人問題や慈善活動まで、英国最大の国民的作家の生涯を鮮やかに再現する。受賞多数の伝記作家による傑作評伝！ 口絵・地図多数収録。サウスバンク・スカイ・アーツ賞受賞作品。

8月 J・B・ホラーズ編 古屋美登里訳 『モンスターズ』

ホラー、ファンタジー、SF、ミステリー、マンガという様々なジャンルで、吸血鬼、ゴジラ、モスマン、ビッグフット、ミイラ、ゾンビなど異形の「怪物たち」をテーマに、ケリー・リンクほか、曲者ぞろいの新鋭・中堅作家18人が腕を競う、異色の短篇アンソロジー。

12月 トム・レイス 高里ひろ訳 『黒い伯爵』

文豪デュマの父であり、『モンテ・クリスト伯』のモデルとなった、アレックス・デュマ（1762-1806）の伝記。植民地ハイチでフランス貴族と黒人奴隷の間に生まれ、フランス革命とナポレオン戦争で「有色人種」として初めて将軍にまで昇りつめた、波瀾の生涯。ピューリッツァー賞受賞作品。

【早川書房】

★今年のおススメ1冊

チャド・ハーバック、土屋政雄訳『守備の極意（上下）』

大学野球の名ショートとして活躍するヘンリー。メジャーのスカウトにも注目され順風満帆に見えた彼の人生は、ただ一球の暴投に狂わされる。アメリカ文学界に突如現れたスター作家のデビュー長篇。

★来年の「隠し球」メインの1球

ウラジミール・ナボコフ『アーダ』若島正訳

それ以外も、(邦題はすべて仮)

トニ・モリスン『ホーム』大社淑子訳 1月刊

ノーベル賞受賞作家が心身に傷を負った兄妹の旅路を描く。

ルース・オゼキ『A TALE FOR THE TIME BEING (あるときの物語)』田中文訳 2月刊

日系アメリカ人作家ルースがカナダの海岸で拾った東京の女子高生の日記。いじめ、104歳の尼僧、量子力学、カミカゼ特攻隊がいりまじる日記は、やがてルースの日常を侵食していく。ブッカー賞最終候補作。著者3月来日予定!

マデリン・ミラー『THE SONG OF ACHILLES (アキレスの歌)』川副智子訳 3月刊

オレンジ賞受賞作。神々が人間世界に干渉していた古代ギリシャ。王子パトロクルスとともに育った半神の英雄アキレスと深い絆を持っていたが、二人の行く手にはトロイ戦争が待っていた。オレンジ賞受賞作。

ニック・ハーカウエイ『THE GONE-AWAY WORLD (ゴーンアウェイ・ワールド)』黒原敏行訳 4月刊

特殊な爆弾によって人類が壊滅し、人の記憶を読み取り不気味な物体を作り出す嵐が吹き荒れる世界。主人公は外の世界に赴くが……。ル・カレの息子による文芸SF大作。

ヘレン・グレミヨン『LE CONFIDENT (相談相手)』池畑奈央子訳 初夏予定

母を亡くしたばかりの女性のもとに届いた謎の手紙。読み進めるうちに第二次世界大戦前夜のフランスで起きた悲劇が明らかになる。

エリザベス・ストラウト『THE BURGESS BOYS (バージェス家の兄弟)』小川高義訳 初夏予定

『オーリーヴ・キタリッジの生活』作者、最新作。

M・L・ステッドマン『THE LIGHT BETWEEN THE OCEANS (大洋をつなぐ光)』古屋美登里訳 夏頃

ピーター・ヘラー『DOG STARS (ドッグ・スターズ)』堀川志野舞訳 秋頃

トム・フランクリン&ベス・アン・フェネリー『THE TILTED WORLD (傾いた世界)』伏見威蕃訳 秋頃

アン・パチェット『STATE OF WONDER (驚異の状態)』芹澤恵訳 秋頃

アーヴィン・ウェルシュ『SKAGBOYS』池田真紀子訳 冬頃

カーレド・ホッセイニ『AND THE MOUNTAINS ECHOED』冬頃

ケリー・リンク『PRETTY MONSTERS (プリティ・モンスターズ)』柴田元幸訳!

【作品社】

★今年のオススメ1冊

マイケル・オンダーチェ、田栗美奈子訳『名もなき人たちのテーブル』

11歳の少年の、故国からイギリスへの3週間の船旅。それは彼らの人生を、大きく変えるものだった。仲間たちや個性豊かな同船客との交わり、従姉への淡い恋心、そして波瀾に満ちた航海の終わりを不穏に彩る謎の事件。

映画『イングリッシュ・ペイシエント』原作者が描き出す、せつなくも美しい冒険譚。コアな外国文学ファンから、初めて海外の小説を手にする読者まで、幅広くおすすめできる一冊です。豊崎さんをはじめとする皆様の温かい応援のおかげで、めでたく重版と相成りました。深く感謝いたします！

★来年の「隠し球」メインの1球

ロバート・クーヴァー、越川芳明訳『ある夜の映画館』春～夏ごろ予定

2012年に『老ピノッキオ、ヴェネツィアに帰る』（作品社）が刊行され、2014年1月には名作『ユニヴァーサル野球協会』が白水Uブックスから復刊予定で、注目が高まりつつあるアメリカポストモダン文学の雄クーヴァー。本書は、ある一日の映画館の上映プログラムの体裁をとった短篇集。チャップリンや、『オペラ座の怪人』、『カサブランカ』などのハリウッド名画が、著者一流の諧謔でパロディにされる。探偵小説／フィルム・ノワールをパロディにした二人称小説『ノワール』も上岡伸雄訳で2015年に刊行予定。

その他

パロネス・オルツイ、平山雄一訳『隅の老人【完全版】』1月刊行決定

元祖“安楽椅子探偵”にして、もっとも著名な“シャーロック・ホームズのライバル”。世界ミステリ小説史上に燦然と輝く傑作「隅の老人」シリーズ。原書単行本全3巻に未収録の幻の作品を新発見！ 本邦初訳4篇、戦後初改訳7篇！ 第1、第2短篇集収録作は初出誌から翻訳！ 初出誌の挿絵約100点収録！ シリーズ全38篇を網羅した、世界初の完全版1巻本全集！

ジュゼッペ・トマージ・ディ・ランペドゥーサ、脇功・武谷なおみ訳『ランペドゥーサ全作品』春～初夏予定。
「山猫」、「短篇集」、「スタンダード論」からなる一巻本全集。

シンシア・カドハタ、代田亜香子訳『幸運について』夏ごろ予定

「金原瑞人選オールタイム・ベストYA」シリーズ。2013年全米図書賞受賞作！

リディア・デイヴィス、岸本佐知子訳『サミュエル・ジョンソンが怒っている』夏ごろ予定

『ほとんど記憶のない女』（白水社）に続く短篇集。超短篇から原書で20ページほどのものまで、全56作品収録。最も短いものは表題作「Samuel Johnson is Indignant」と「Certain Knowledge From Herodotus」、「Away From Home」の3作品で、わずか1行。『ほとんど記憶のない女』以前の作品となる短篇集『ブレイク・イット・ダウン』も作品社より岸本佐知子氏の翻訳で刊行予定、唯一の長篇『話の終わり』は弊社より既刊です。

ファン・ガブリエル・バスケス、服部綾乃・石川隆介訳『密告者』夏ごろ予定

バルガス＝リョサが激賞するコロンビアの新鋭。本邦初訳。

エドウィージ・ダンティカ、佐川愛子訳『輝く海のクレア』8月予定

全米が注目するハイチ系女性作家の、2013年8月原書刊行の最新長篇小説。

ウラジーミル・ナボコフ、若島正訳『スピーク・メモリー』秋ごろ？

ナボコフの自伝。既訳（晶文社）にはない新章を含む決定版新訳。

ウラジーミル・ナボコフ、メドロック麻弥訳『道化師をござらん』年末？

ナボコフの完結した長篇小説としては、最後の作品。三十余年ぶりの新訳。

スコット・フィッツジェラルド、森慎一郎訳『夜はやさし』年末？

ホーム社／集英社より2008年に刊行されたものの復刊。おまけつき。

【群像社】

★今年の「収穫」

リュドミラ・ウリツカヤ『クツキイの症例』(上・下) 日下部陽一訳

ロシアの現代文学で翻訳の多い作家といえば、ペレーヴィン、ソローキンと、このウリツカヤでしょう。群像社からは『それぞれの少女時代』(沼野恭子訳)、新潮社からは『ソネチカ』(沼野恭子訳)、『通訳ダニエル・シュタイン』(前田和泉訳)、『女が嘘をつくとき』(沼野恭子訳)が出ていますので、女性作家では間違いなく一番です。ロシア・ブッカー賞も受賞しているこの長編は、現時点ではそのウリツカヤの代表作。ロシアではドラマ化もされていて、「大河ドラマ」になるほどの歴史と人間の壮大な物語でありながら、現代小説らしい実験的(幻想的)要素もあり、人びとが粛清の恐怖にさらされながら暮らしていたソ連社会の特徴も、そこから抜け出そうとした若者たちが生んだジャズを中心とするサブカルチャーの雰囲気もふんだんに味わえます。

訳者にとってはこの大作が初の翻訳ということで、最初の原稿を受け取ってから数年、何度も手を加えてもらってようやく今年「収穫」できました。その甲斐あって、「原作の豊かさと複雑さを伝える優れた翻訳になっているのが嬉しい」(沼野充義・評、毎日新聞)と評価してもらいました。

★来年の「隠し球」

出す本、出す本、こちらはまったく隠しているつもりはないのですが、世間の目からはひょっとして全部「隠し球」?…と思うことしばしばですが、なかでも特に注目されにくそうな海外文学の評論を一冊。

・角伸明『あなたは本当の「初恋」を知っていますか』(仮題)

ツルゲーネフの『初恋』が日本で初めて翻訳されてから来年で100年。大正時代の生田春月訳から最新の沼野恭子訳にいたるまでこれまで10種類以上の翻訳が出ていますが、「いまだかつて一度としてそのストーリーが読まれたことがない」と断ずる著者がミステリー小説を読むように『初恋』に描かれている人間関係を読み解いていきます。翻訳批評は、少なくともロシア文学界のなかでは、あまり評判がよろしくなく、しかも数ある名訳者たちの翻訳を検証していくので、出版社としては二の足を踏みたくなるどころですが(しかも著者が関西の人なので関東では分が悪いのです)、ここはひとつ嫌われてもいいという覚悟で刊行します。

既に出した本で「隠れている球」がいっぱいあるので、来年のソチ・オリンピックにひっかけて、この機会に並べさせてください。「ソチ」と聞いても、多くの人にとって「それはどこ?」でしょうが、スキーなど雪上競技の会場となる「クラスナヤ・ポリャーナ」はコーカサス山脈のなか。「コーカサス(カフカース)」ならロシア文学では多少は馴染みがあるのではないのでしょうか。コーカサスが舞台の作品といえば…

・プリスターフキン『コーカサスの金色の雲』三浦みどり訳 2300円

・トルストイ『カフカースのとりこ』青木明子訳 1000円

もともと、ロシア文学のなかで「ソチ」の位置する黒海沿岸は南国の避暑地のイメージ。黒海沿岸が舞台となっている作品はといえば…

・バーベリ『オデッサ物語』中村唯史訳 1800円

・ペレーヴィン『虫の生活』吉原深和子訳 1800円

(クリミア半島の海辺の町が舞台。たしかに寒いところでは虫も体がすくんで活躍できないわけです。)

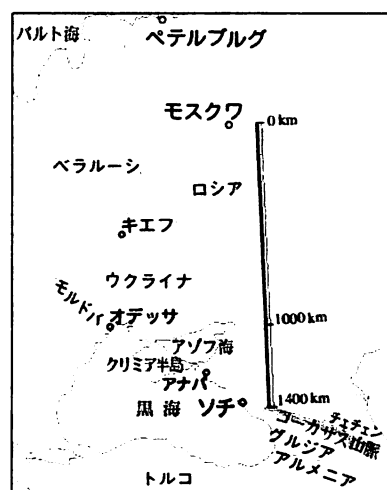
・クーチク『アゾフ海のペロサライスク砂州を訪れた際に吟じたオード』
たなかあきみつ訳 1500円 (海をうたった詩です)

・ナリ・ポドリスキイ『猫の町』津和田美佳訳 1500円
(「その町」はクリミア半島にあります)

・イスカンデール『牛山羊の星座』浦雅春訳 1800円
(黒海沿岸、グルジアのなかの自治共和国アブハジアが舞台)

・ブーニン『日射病』橋本早苗訳(『ブーニン作品集3』所収) 2300円
(避暑地アナバから来た小麦色に焼けた女との出会いから始まる短編)

ロシアでオリンピックというと、1980年のモスクワ・オリンピックのボイコットが思い出されて内心ドキドキなんです、無事に開催されて、ロシアへの関心が高まることを願っています。



【藤原編集室】

★今年の一冊

レオ・ペルッツ『ボリバル侯爵』垂野創一郎訳、国書刊行会

ナポレオン戦争時代のスペインを舞台に、神秘的な力を持つ侯爵、占領軍の青年将校、ゲリラ、彷徨えるユダヤ人などが入り乱れる伝奇歴史小説。占領軍ナッサウ連隊の壊滅は序文で予告されていて、その逃れ難き破局へ向かって運命の歯車は回りつづける。読者はその成行きに驚き呆れながらひたすら頁をめくるしかない。探偵小説ばりの巧緻なプロットと、ボルヘスを感嘆させた高度な幻想性をあわせもつ第一級のエンターテインメント。

★来年の隠し玉

ポール・コリンズ『バンヴァードの阿房宮——世界を変えなかった13人（仮題）』山田和子訳、白水社
ミシシッピ川流域風景の巨大パノラマ画で各地を巡業、巨万の富と名声を得ながら今日まったく忘れられた画家、「新発見」のシェイクスピア劇（実は自分の創作）の上演を企てた贋作家、トンデモ学説の元祖「地球空洞説」の提唱者、X線を超えるN線を発見した物理学者などが次々登場。壮大な夢と特異な才能をもちながら、世界を変えることなく歴史から忘れられた天才13人を紹介したポートレート集。「失敗」の研究として、困難な時代を生きる現代人に多くの示唆を与える——かどうかはともかく、奇人列伝としても奇説妄説の見本市としても嬉しい好読物。

●白水Uブックス／海外小説 永遠の本棚

ロバート・クーヴァー『ユニヴァーサル野球協会』越川芳明訳 ※1月刊

ゲーム世界に生きる男を通して現代の神話を創造する、ポストモダン野球小説の殿堂入り名作。

グスタフ・マイリンク『ゴーレム』今村孝訳

33年毎にプラハのユダヤ人街に現れるゴーレム。夢と現実が混淆する神秘小説。原書挿絵も収録。

ブルース・チャトウィン『ウッツ男爵』池内紀訳

マイセン磁器の蒐集家の生涯を20世紀史と重ね合わせながら、蒐集という奇妙な情熱を描く。

チャールズ・ディケンズ『エドウィン・ドルードの謎』小池滋訳

クリスマスの日に姿を消した青年は殺害されたのか？ 文豪ディケンズの絶筆となった探偵小説。

フラン・オブライエン『スウィム・トゥー・パーズにて』大澤正佳訳

作家と登場人物たちが大騒動を繰り広げるアナーキーな実験精神に溢れた喜劇小説。

イーヴリン・ウォー『ピンフォールドの試練』吉田健一訳

船旅に出た作家は彼を攻撃する幻聴に悩まされる。ウォー晩年の傑作を吉田健一の名訳で。

【来年は必ず！】

メイ・シンクレア『胸の火は消えず』南條竹則編訳、創元推理文庫 ※2月刊

女性心理や性の問題、心霊学、死後の世界などを取り上げた異色の怪談集。

メアリー・エリザベス・ブラッドン『レディ・オードリーの秘密』駒月雅子訳、国書刊行会

美しい准男爵夫人の抱える暗い秘密とは？ ヴィクトリア朝英国の恐るべきページターナー。

【水声社】

★今年の「自信の直球ストレート」

ファン・ホセ・サエール『孤児』寺尾隆吉訳

本年から刊行を開始した〈フィクションのエル・ドラード〉シリーズの1冊。現代アルゼンチン最高の作家として各国で絶賛された、ボルヘスの系譜を汲む幻想作家の雄。16世紀の新大陸で起こった史実を出発点に、人間の記憶と存在をめぐって哲学的思索を鮮やかなイメージで展開する破格の物語。「この1冊はニーチェの全著作に匹敵するのではないか」と保坂和志さんも『みすず』（2013年10月号）で絶賛！

（自慢のスライダー）

レオポルド・マウラー『ミラーさんとピンチョンさん』波戸岡景太訳

ガイブンファンならどこかで聞いたことのある名前をもった二人の主人公が、モノクロームのグリッドのなかを、愛を求めて放浪するロード・コミック。「その本が日本語で読めたことの幸運に心の中で手を合わせて感謝したくなる翻訳書」（鴻巣友季子さん）

★来年の隠し球

◎ 昨年末のこの企画でアナウンスしたいくつかの書籍がまだ刊行されていない、という事実にはあえてふれずに、鬼に笑っていただきます！

フリオ・コルタサル『対岸』寺尾隆吉訳 2月刊行予定

来年で生誕100年。言わずと知れた幻想文学の旗手フリオ・コルタサルの処女短篇集。「剽窃と翻訳」「ガブリエル・メドラーノの物語」「天文学序説」、さらに秀逸な短篇小説論も合わせて収録。鉄板。

ブランセス・サッフォー『チュチュ 世紀末巴里風俗奇譚』野呂康・安井亜希子訳 3月頃刊行予定

世紀末のパリを舞台に俗悪ブルジョワの主人公が繰り広げる奇想天外、荒唐無稽な露悪趣味の極北！ 社会の病巣をキツェに描いた世にも奇妙な珍書中の珍書！ ハチャメチャすぎる内容に抱腹絶倒間違いなし！！

デイヴィッド・ベロス『ジョルジュ・ペレック伝 言葉に明け暮れた生涯』（仮題）酒詰治男訳 2月刊行予定

凡庸に凡庸を重ねすぎて非凡な作品を発表し続けたジョルジュ・ペレックの伝記の決定版です。実験作家ペレックが、もっともらしい小説をいっさい書こうとしなかったのはいったいなぜなのか。その理由の一端が垣間見えるかもしれません。

ジョルジュ・ペレック『昇給』（仮題）桑田光平訳 2～3月刊行予定

『人生 使用法』よろしく、会社の組織体を現代社会の縮図として描き出した作品。「二者択一」で進んでいくゲームブックのような、言ってみれば、人生の確率小説です。福永信の作品みたく、句点がないので、延々と迷路を進んでいくような途方のなさを味わえます。

ドン・デリーロ『ポイント・オメガ』都甲幸治訳 5月頃刊行予定

2013年はデリーロ・イヤーでしたが、昨年より鋭意編集作業中の本書の邦訳を待ちこがれているかたも少なくないはず。ヒッチコックや合衆国のイラク戦争を引用しつつ、人類の叡智の極点（ポイント・オメガ／テイヤール・ド・シャルダン）を問いかけるこの中篇小説の刊行まで、あとすこし！

（さらに……）

アブドゥラマン・アリ・ワベリ『バルバラ』林俊訳 1月刊行予定

ル・クレジオがノーベル賞受賞スピーチを捧げた、フランスとジブチ混血のアフリカ作家の作品。小説とエッセイ、詩と風刺の間を行き来するような文体が特徴。書くこと＝生きることを切実に訴える、歴史に抵抗するアフリカ現代小説。

（秘められた話ですが……）

・『秘められた生』（小川美登里訳）に引き続き、パスカル・キニャールのコレクションを計画中！

・バンドデシネ（BD／ベージェ）だけではなく、世界中（日本も含む）の漫画を取り集めた、世界漫画コレクションを画策中！

【松籟社】

★今年の自信の1球

シギズムンド・クルジジャンフスキイ、秋草俊一郎訳『未来の回想』

80年以上前に書かれたタイムトラベル小説。「時間」をめぐって創出された言葉と論理の異様な構築物が、読者の思考をとめどなく駆動させる。没後約40年を経ての「再発見」以降、世界を瞠目させつづける異能の作家の代表作。

★来年の「隠し球」メインの1球

ボフミル・フラバル、阿部賢一訳『断髪式』3月末予定

「フラバル・コレクション」。ビール醸造所を舞台にした、ビールが飲みたくなる小説。奔放な語り手マリシユカ（作者の母親がモデルだそうです）、「2週間、やっかいになるよ」と言いつつやってきて死ぬまで居座るような天然キャラ・ペピンおじさん（作者のおじさんがモデルだそうです）はじめ、一読したら忘れられない魅力的な人物が数多く登場。映画化もされています（イジー・メンツェル監督作品）。

●その他

ボフミル・フラバル『パービテレー』『水底の真珠』

「フラバル・コレクション」続刊。

シギズムンド・クルジジャンフスキイ、上田洋子訳『文字殺しクラブ』

『瞳孔の中』、『未来の回想』に続く第3弾。

※以下、去年のリストに載せておきながら、ついに刊行できなかったもの。大いなる反省とともに。

ベッペ・フェノーリオ、橋本勝雄訳『個人的な事情』

20年超ぶりの「イタリア叢書」。カルヴィーノの同時代人フェノーリオによるパルチザン小説。

ルイス・セプルベダ、崎山政毅訳『世界の果ての世界』

「創造するラテンアメリカ」。グリーンピース（捕鯨に反対している方々のほう）小説（?）。

【みすず書房】

★今年のイチオシ

ワシーリー・グロスマン『万物は流転する』斎藤紘一訳（12月刊）

年の瀬に出る本書でガイブン界に活気を与えたい。ソ連の強制収容所に30年、ようやく出所した男の目に映ったのは、スターリン後の社会と世界だった。昨年読書界の話題をさらった（←おおげさ）大作『人生と運命』（全3巻）のグロスマンが最後の力をふりしぼって書いた傑作長編、勁草書房さんの初訳（内村剛介編・現代ロシア抵抗文集6）刊行以来40年ぶりの新訳。解説は亀山郁夫。

★来年の変化球と直球

パトリック・ドゥヴィル『ペスト&コレラ』辻由美訳（初夏予定）

20年前に白水社さんから「新しいフランスの小説」シリーズの一冊として出された『花火』（野崎歓訳）の作者でナント出身のパトリック・ドゥヴィル、久々の日本上陸。今やドゥヴィルも56歳のベテランになっているが、本作『ペスト&コレラ』でフェミナ賞など数々の賞を受け、実力のほどを改めて見せつけた。19世紀から20世紀半ばまで、細菌学者として頭角をあらわしパストゥールの右腕になりながら、東南アジアに行きつばなしになったアレクサンドル・イェルサン（←変人）。このペスト菌発見者のランボーみたいな生涯を、斬新な手法で描く冒険科学時代小説。

ブルース・チャトウィン『オン・ザ・ブラック・ヒル』榎木伸明訳（晩秋予定）

言わずと知れた『パタゴニア』のチャトウィン。没後ますます人気の高まる紀行作家（←かっこいい）の、これまで訳されていない唯一の小説がようやく出る。ウェールズの小さな村に生まれた一卵性双生児のルイスとベンジャミン。小宇宙である実家で過ごされる二人（で一人？）の数奇な人生を淡々と描きながら、背景に暗く広がる20世紀の現代史を浮かび上がらせる名作。ミニマムな文体で悠々とした語りの底から作者の人間観がにじみ出るさまが感動を与える。この作者にして、この訳者、まちがいなし！

この他、まだ作者名・作品名・訳者名など明かせませんが、伝説の現代ドイツ小説の本邦初訳や、カリブ出身女性作家の宝石箱のような短篇集も、鋭意進行中。

【筑摩書房】

★今年のおススメ一冊

ミシェル・ウエルベック『地図と領土』野崎敏訳

つねに話題を呼ぶウエルベックのゴンクール賞に輝いた長編で、今回は特に面白さ抜群！前作『素粒子』では現代人の極限の孤独が描かれたが、さらにその彼方の孤独が読む者の胸をえぐる。主人公の芸術家と、獰猛な世捨て人ウエルベック（作家自身が登場！）の交流が何とも言えずいい味で、そのウエルベックが首なしの惨殺死体で発見される。その殺人事件の謎を追って、モダンな美とスリルあふれるウエルベックのタッチが躍動する、万華鏡を見るような目くるめく面白さの最高傑作です。

★来年の「隠し球」メインの一球

ヘレ・ヘレ『犬に墮ちても』渡辺洋美訳

デンマークを代表する女性作家ヘレ・ヘレの日本初訳作品。42歳の女性作家が、ある日突然、日常から逃げ出して海辺の寂れた田舎町に流れ着く。その町の親切なカップルに迎えられ、生活を共にすることで次第に彼女は鬱屈から開放されていくが、同時に町の住人たちが失ったものに気付いていく。簡潔かつさりげない言葉で日常を描写しつつ、その裏でドラマは動いているという「ミニマリスト」と称されるヘレ・ヘレの魅力が存分に伝わる物語。ヘレ・ヘレは2009年にスウェーデンのペール・オローヴ・エンクウィスト賞、2012年にデンマークの出版協会栄誉賞を受賞している。

そのほか

ル・クレジオ『隔離の島』中地義和訳 既刊ですが12月に出たばかりなので……

フランス発の船で天然痘が発生、モーリシャス近くの島に足どめされる。四十日に及ぶ検疫隔離、食糧も不足し死が忍びよる極限状態を透明な文体で描いた長編傑作。

ポール・ギャリコ『猫語のノート』灰島かり訳 これも既刊ですが12月刊です

単行本と文庫を合わせると15万部を超えるロングセラー『猫語の教科書』続編。「あがめよ、猫を！」の言葉から始まる、猫写真多数、猫好き必読の猫本。

ルイス・シャイナー『グリンプス』小川隆訳 ちくま文庫1月刊予定

ジミヘン、ビーチボーイズ、ドアーズ、伝説のロックSF復刊！

『アンナ・カヴァン短篇集（仮題）』西崎憲訳（2014年内刊行予定）

2013年の「アサイラム・ピース」につづき、2014年もカヴァンの新訳登場。西崎セレクトで。

スティーブ・エリクソン “These Dreams of You” 越川芳明訳

来年中には刊行できるかも……。

D. H. ロレンス『息子と恋人』小野寺健・武藤浩史共訳 ちくま文庫来夏予定

母の影響から逃れられないポール。恋人ミリアムや人妻クララとの恋愛を経て、母からも解放されて、ようやく一人の男として、人間として、自立の道を歩みだす。ロレンスの自伝的小説とも言われる代表作のひとつ。

ほか『アンドレ・ジイド集成』（二宮正之訳／全5巻予定）や『バルザック・コレクション』（柏木隆雄訳／ちくま文庫・全3巻）

【東京創元社】

★今年のイチオシ

ローラン・ビネ／高橋啓訳『HHhH——ブラハ、1942年』

〈金髪の野獣〉とも〈第三帝国でもっとも危険な男〉とも呼ばれたナチト・ドイツの高官、ユダヤ人大量虐殺の首謀者、責任者であったハイドリヒ。彼の暗殺計画は〈類人猿作戦〉と呼ばれ、ロンドンに亡命したチェコ政府が送り込んだ二人の青年パラシュート部隊員によってブラハで決行された。そして、それに続くナチの報復、青年たちの運命……。ハイドリヒとはいかなる怪物だったのか？ ナチとはいったい何だったのか？ 本書の登場人物はすべて実在の人物である。史実を題材に小説を書くことに、ビネはためらい、悩みながら全力で挑み、小説を書くということの本質を自らに、そして読者に問いかける。小説とは何か？

*HHhHとは、ドイツ語の Himmlers Hirn heisst Heydrich 即ち、「ヒムラーの頭脳はハイドリヒと呼ばれる」という意味で、ラインハルト・ハイドリヒという男がいかにか、ヒムラーに重用されていたか、ハイドリヒがいかにか力を持っていたかを語る、言い回しです。

『ダルヴィーシュの館（仮）』イアン・マクドナルド／下楠昌哉訳 創元海外SF叢書

犠牲者ゼロの奇妙な自爆テロがすべての始まり！？ テロ以降精霊が見えるようになった青年、テロの謎を探る少年探偵&老経済学者、一大ガス市場詐欺を企むトレーダー、伝説の蜜漬けミイラ「蜜人」を追う美術商、起業資金調達のため行方不明の家宝を探る新米マーケットターの六人が、EUに加盟し天然ガス&ナノテク景気に沸く近未来のイスタンブールを駆け回る。過去と未来、現実と神秘が融けあう都市を多層的に描く、英国SF協会賞・キャンベル記念賞受賞の傑作都市SF。解説＝西島伝法

SFと銘打っていますが、幅広い読者に読まれるタイプのものです。よろしく願い致します！

ラフィク・シャミ『愛の裏側は闇（仮）』全3巻 酒寄進一訳 海外文学セレクション

ヨーロッパ、アジア、アフリカの三大陸を結ぶ要衝の地、シリアの小さな村。そこには、信仰を異にし骨肉の争いを繰り広げるふたつの旧家があった。カトリックの家に生まれたファリードと、シリア正教会を信じるラーナは12歳のときに出会い、恋に落ちる。ふたりの悦びと哀しみに満ちた恋物語と同時に、秘密警察の高官マフディ・サイドの殺人事件が語られる。ふたつの要となる出来事が304章のエピソードを通してつながり、100年にわたるアラブ世界の精神、風土をモザイク画のように描き出し、とてつもなく壮大な物語を浮かび上がらせる。ドイツ屈指の亡命作家シャミによる、構想30年傑作大河小説。

『Q』上下 ルーサー・ブリセット／さとうななこ訳

16世紀、宗教改革まっただ中の中部ヨーロッパを舞台にした、再洗礼派の青年の冒険譚。カトリックへの脅威を排除すべく、ローマ教皇庁差しむけたスパイ“Q”の正体は？ 神聖ローマ皇帝カール五世、フッガー家、トマス・ミュンツァー、カトリック、ルター派、傭兵、枢機卿、本屋、ユダヤ人入り乱れ、謎あり歴史ありの超大作。著者ルーサー・ブリセットはイタリア（ボローニャ）の作家5人組のハウスネーム。2009年には『Q』の続編『ALTAI』を刊行。『Q』の刊行当初は著者の正体がわからず、イタリアでは『薔薇の名前』のウンベルト・エーコではないかとも言われたらしい。

パトリック・デウィット『Ablutions』 茂木健訳

『シスターズ・ブラザーズ』が、ブッカー賞候補作ながら『このミステリーがすごい!』の第四位にランクインした(トップ10では唯一の新人)、パトリック・デウィットのデビュー作。舞台はハリウッドの外れにあるバーで、語り手はそのバーテン。一癖二癖あるどころではない客たちの悲惨な酔態が、悪夢のなかを漂っているような感覚で生々しく描き出されます。登場人物が全員泥酔しているという超・異色作。ドライなユーモアが全編を貫いているのは『シスターズ・ブラザーズ』と同様ですが、『シスターズ・ブラザーズ』がやわらかく思えるほどに、こちらの作品の方がより過激で冷酷です。

他に、ケイト・アトキンソンが出ます(が、ミステリです)。そしてウンベルト・エーコの『プラハの墓地』という、偽書ものの大作も準備中ですが、間に合いますか……。頑張ります!

【新潮社】

★今年の自信作

12月10日、カナダ初のノーベル文学賞を受賞したアリス・マンローの最新短篇集です。生涯最後の本と思いさだめた短篇集を、みずから「フィナーレ」と銘打った連作(4篇、いずれも傑作!)でしめくくるなど、80歳を越えたマンローならではの、さらに驚かされるのは、その作品が鮮やかさを増しこそすれ、まったく枯れていないこと。「短篇の女王」の強靱さ、恐るべしです。

★来年の隠し玉 メインの一球

トマス・ピンチョン『重力の虹』佐藤良明訳 初春刊行予定

著者代表作にして二十世紀ポストモダン文学の最高傑作が佐藤良明訳で遂にそのヴェールを脱ぐ。哄笑に満ちた大長編。「トマス・ピンチョン全小説」完結。

来年の自信作、まだまだあります

トム・マッカーシー『もう一度』榎木玲子訳 1月刊行予定

謎の事故で記憶を失った男が、巨額の示談金で過去を再現しようと苦闘する。論争を巻き起こした異色の話題作。

ブライアン・エヴンソン『遁走状態』柴田元幸訳 2月刊行予定

極めて明晰な言葉で鮮やかに描かれる、19の悪夢。雑誌掲載やアンソロジーで日本でも人気急上昇中の作家の、待望の初単行本。

セス・フリード『大いなる不満』藤井光訳 来春刊行予定

平均寿命1億分の4秒の微小生物、宇宙に浮いたまま暮らす人間——。奇怪な設定で読者を圧倒する新鋭の初短編集。

イアン・マキューアン『スウィート・トゥース』村松潔訳 来春刊行予定

MI5所属の美人エージェントを主人公とするスパイ小説・恋愛小説・自伝的文学論。ブッカー賞・エルサレム賞作家の最新作。

カルミネ・アバーテ『風の丘』関口涼子 来夏刊行予定

イタリア半島最南端、イオニア海から風の吹きつける丘に暮らす一族の、二十世紀初頭から現代にわたる四代の物語。

ジュンパ・ラヒリ『ロウランド』小川高義訳 来夏刊行予定

祖国で政治運動に身を投じた弟とアメリカへ留学した兄、そして妻たち、娘たちの運命。インド系アメリカ作家の待望の最新長篇。

ミランダ・ジュライ『It Chooses You』岸本佐知子訳 来夏刊行予定

映画監督でもある人気作家による最新刊。フリーペーパーの個人売買欄に登場する人々を訪ねる異色のノンフィクション。

ジュリアン・バーンズ『人生のレベル』土屋政雄訳 来秋月刊行予定

気球に魅せられた写真家、女優と恋に落ちた軍人、そして突然最愛の妻を亡くした作家。ブッカー賞作家の痛切な最新作。